

2006 (平成18) 年 11 月

AICHI UNIVERSITY LIBRARY COMMUNICATIONS

2006. 11

韋 編

いへん

愛知大学図書館報

No. 33

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、
なめし皮の紐でとじた上古の書物。

学生の活字離れは本当か？

図書館長 渡 辺 和 敏

わたしは日本前近代の社会経済史を専門としているが、図書館を利用することが比較的少ない。論文執筆のための資料は博物館や資料館、あるいは個人所有者を頼って閲覧することが多く、刊行されている必要図書は原則的に自分で購入しているからである。

だからと言って、図書館と無縁というわけではない。学生時代は、本を買う資金に乏しいので専ら大学の図書館を利用して、卒業論文や修士論文の作成に際しては国会図書館などへ通ったりもした。

愛知大学へ赴任して30年になるうとしているが、図書館との付き合い方は基本的に学生時代と変わっていない。すなわち、常に側においておきたい専門図書や手軽な文庫・新書本などは自分で購入し、利用度の少ない本については図書館を利用している。ただし学生に対しては、大いに図書館を利用するよう、常々指導しているつもりである。

愛大図書館とわたしの関係はこのように比較的希薄ではあるが、ときに予想外の資料・図書に出会ったり、制度上の恩恵にあずかったりもしている。例えば、赴任して間もない頃のことであったが、図書カードに「菱川師宣東海道綱目分間之図」というものがあったので借覧してみると、それは各地の博物館な



どで喉から手が出るほど欲しがっている、かの有名な元禄3年(1690)の菱川師宣による「東海道分間絵図」全6巻の初版であった。何故このように貴重な絵図を愛大図書館で入手できたのか、いまでも不思議に思っている。

別の体験では、ある自治体史の編さんを手がけている最中、江戸時代の紀行文や随筆をみる必要が生じた。当時の社会経済史学でこうしたものを資料とする機会は少なかったので知識が薄かったが、とりあえず愛大図書館で検索してみた。目指す本は、明治26～30年(1893～7)刊行の全集に収録さ

れていた。国文学専攻の人からみれば当然と思われるかも知れないが、わが愛大図書館に明治年間に刊行された資料集が所蔵されていて、何となく誇らしく感じたものである。

近年では、別のことで愛大図書館から恩恵を受けている。それは、本屋や図書館に出回ってこない博物館・資料館の年報とか大学の紀要類を、愛大図書館を通じて複写してもらっていることである。入手不可能な古い図書についても、ほかの図書館所蔵のものから必要部分をコピーしてもらっている。愛大図書館が情報化社会に対応し、ネットワークを介して学内外との連絡を密にしているから可能な制度である。

このような個人的恩恵は別にして、わたし

には愛大生による図書館の利用実態が大きな関心事である。学生にとっては愛大図書館が最も身近で、もしかすると唯一の図書情報収集の施設であるかも知れないからである。

しかし最近の学生のレポートや卒業論文をみると、残念ながら図書館へ足を運び、実際に関連の本を読み込んだ形跡が少なく、ほとんどがインターネットからの情報で済ませている。世間一般で言われているように、やはり今の若者は本離れ、活字離れ現象をおこなっているのだろうか。

そこで2006（平成18）年度版『愛知大学図書館概要』を開き、愛大図書館の入館者数をみてみた。昨年度、すなわち平成17年度の愛大3校地の図書館の年間入館者数は合計79万2,976人、そのうち豊橋図書館は296日の開館で33万9,564人、名古屋図書館は295日の開館で33万8,770人、車道図書館は297日の開館で11万4,642人である。愛大3校地の図書館を合わせれば、平均して1日に約2,700人の入館者があったことを示している。毎日、愛大生の4人に1人は図書館へ立ち寄っていることになる。

この入館者数を過去にさかのぼってみると、同『概要』は詳細な数字ではなく折れ線グラフで示すだけであるが、平成11年度からずっと大体年間80万人前後で推移している。そしてそれ以前の平成6～10年度は大体年間55万人前後である（平成5年以前は表示されていない）。すなわち平成11年に、前年度までの1.45倍の入館者数になり、その状況が今日まで続いているのである。今の若者の本離れ、活字離れを全面的に否定する根拠にはならないが、少なくとも愛大生は10年以前よりは図書館へ出向く回数が増加しているのである。

学生が卒業論文やレポートで必要図書を引用できていないのは、図書館へ行っていないからではなく、その図書を探し得ていないのか、あるいは探し得てもその引用の仕方がわかっていないからである。要は、指導する側のわたしたちの問題であり、それを理解できない学生の問題でもあろう。根気よく指導を続けなければならない所以である。

入館者数が急増した平成11年には何が

あったかという、4月に豊橋図書館の増築・改修工事が完成して図書収容能力と閲覧席数が拡大されている。その前年には、やはり名古屋図書館で閲覧席が増やされ、豊橋・名古屋図書館で開館時間が延長されている。ハード面でも、ソフト面でも、改善をすればそれが直ちに入館者増として反映するのが愛大図書館であることが証明されたのである。

図書館を改善すれば入館者が増える、すなわち愛大生は図書館の改善を暗黙のうちに希求しているのである。若者の本離れ、活字離れが嘆かれているなかで、これは喜ばしいことである。だからわたしたちは愛大生のこうした図書館に対する潜在的な希求に対し、極力応じる責務があるのではないだろうか。

周知のように愛大図書館は、全国の大学図書館と比較すれば多くの面で優れているが、一方で改善しなくてはならない問題もあり、それは特に豊橋図書館において顕著である。名古屋・車道図書館は全面開架式で学生に供しているが、豊橋図書館の開架率はわずかに23パーセントに過ぎない。書庫はパンク状態で、在庫図書の処分を検討するというウワサもあるが、それはトンデモナイ自殺行為であり、早急な増設が不可避である。

図書館職員の配置問題は、豊橋図書館に限らず、名古屋・車道図書館でも再考の余地があるように思う。豊橋・名古屋図書館では夜間・特別開館日を業務委託スタッフで対応し、図書受入れ整理業務もアウトソーシング化しているというし、車道図書館では図書整理・閲覧に関しては全面業務委託をしているという。図書館とは単に本を提供すれば済むものではなく、特に大学付属施設のそれは先に述べたように利用学生への援助と指導という大切な業務があると思う。職員の配置には、こうしたことも考慮に入れるべきであろう。

わたしのこれまでの人生は、必ずしも常に図書館と密接な関係にあったわけではないが、それでも必要不可欠の存在であった。そして今後も図書館の役割は増大こそすれ、減退することはないと確信している。

以上、図書館長就任に際し、求めに応じて思うことどもを記してみた。

（経済学部教授）

心理学専攻の専門教育における図書館データベースの活用

文学部心理学専攻教授 浅野俊夫



はじめに 2005年度から文学部は人文社会学一学科に統合され新たに図書館情報学専攻と心理学専攻が増設された。一年生の秋学期末に専攻への

配属が決まることになっていたのですが、昨年度、心理学専攻が提供する専門科目は春学期の入門講義(心理学)と秋学期の入門演習(心理学)だけであった。この科目は心理学概論に位置づけられているので、三分冊の教科書のうち二冊を指定して、毎週1章ずつ進み、毎回内容の要約と感想を提出させるという敢えて厳しい授業方法をとった。

1章が40頁ぐらいあるので予習をしてこなかったら授業をきいてもよくわからないけど、一度読んできて解説をきくと心理学の体系がなんとなく分かってきて、関心を深める者と関心を失う者との違いがはっきり分かれてくるようである。とにかく、ゴールデンウィークを過ぎたころから、電車の中や図書館で水色や緑色の心理学の教科書を読む学生が増えてくるようになった。まだ専攻が決まっていない文学部一年生にとって図書館は重要な自習場所である。

また、このように敢えて厳しい学修態度を要求したことにはもう一つの理由がある。二年生になって心理学専攻に入るともっと過酷な「心理学基礎実験」という月曜日の午前中2コマぶっ通しの実験実習があり、その実験レポートを論文形式で翌週までに提出しなければならない、どの大学でも心理学科・心理学専攻の学生にとって最大の難関である。しかし、それを乗り越えないと卒業もできないし、認定心理士の資格申請もできないので、アルバイトや部活を調整しながらどうにかクリアしていかなければならず、そのた

めにも、一年生のうちから厳しい学修態度を身につけさせようという親心である。

心理学専攻生の教育はじまる 3月末の成績発表を見てから学生たちは自分の志望する専攻を最終的に決める。心理学専攻の志望者は36名で、定員を若干オーバーしていたが実験設備の許容量以内であったので全員受け入れることができた。心理学専攻第一期生36名の誕生である。この二年生になると、先に紹介した心理学基礎実験の他に「心理学研究法」という専攻必修科目もはじまる。この「心理学研究法」(岡田担当)では、アメリカ心理学会(APA)が制作する、世界二十四カ国以上、1900誌にのぼる心理学に関する研究雑誌の記事、書籍、学位論文などの英文要約を収録した「PsycINFO」データベースの使い方を教えることになっていた。このデータベースはすべて英文であるが、我が国においても心理学教育の必須アイテムといわれており、心理学専攻設置が決まったときから図書館では二年生が出るまでには何とかしようとご配慮いただいた結果、豊橋校舎内のネットワーク内ならどのパソコンからでもアクセスできるようになり、無事に春学期の授業を終えることができた。

Psychological AbstractからPsycINFOへ 筆者が心理学専攻三年生で卒論のテーマを探していた1964年頃は、図書館で朝から晩まで分厚い大量の「Psychological Abstract」という雑誌を調べてはその要約を読んでメモをとることに明け暮れていた。この雑誌は先述したPsycINFOの前身であり、1840年代から発表された心理学関連の論文や書籍の書誌情報や要約を、主題索引や著者索引で検索することができるので、関心を持ったテーマ関連の論文を調べ要約を読んで、大事な文献のリストを作り、指導教員に見てもらっ

てその中から特に重要なものを抜き出し、その書籍や雑誌を図書館で探して本文を読みメモをとるといふことの繰り返しであった。富士ゼロックスと英国ランク社が合併で複写機製造会社を作ったのが1962年であるから、普通紙コピー機はまだ普及しておらず、学生は現物を読んでメモをとるしか方法がなかった。

ところがPsycINFOデータベースが使える現代の学生は、学内のパソコンならどこからでもこのデータベースにアクセスできる。しかも愛知大学図書館では、このPsycINFOを、カリフォルニア大学10キャンパスのCalifornia Digital Libraryと同じCSA (Cambridge Scientific Abstract) という、異なった複数のデータベースを同じ簡単な検索手続きでしかも自国語の指示で進めることができるシステムを採用しているので、網羅的な検索がきわめて簡単にできる。これまでPsycINFO以外のデータベース（とくに医学系・生物系のデータベース）にも関心を持つように教育しても、データベースによって検索式や手続きが違うのがネックになっていたが、このような共通検索ツールのおかげでこれから分野を超えた交流が促進されるであろう。なお、CSAには日本語の音声で画面操作を教えてくれるチュートリアルまで用意されている。

サイテーションindex付き PsycINFO ネットワークを通じてパソコンでアクセスするデータベースは様々な書誌項目で検索できるし、検索結果をメールで送信したり、自分のパソコンに保存したりできるだけでなく、その書式も論文原稿の引用文献欄ですぐ使えるように指定することもできる。また、電子ジャーナルのように本文も電子化されている場合はそのことが表示されるのでフルテキストがすぐに入手できる場合もある。

さらに、その論文の要約の他に、その論文の引用文献リストの部分も表示され、個々の引用文献が他の人の論文に引用された回数（サイテーションindexという）が付記されている。検索によって得られた文献リスト

にはすべて引用回数が付記されているので、リストのうちどの論文が重要かすぐに分かるし、その論文の要約を表示すると、その論文が引用した文献の引用回数も表示されるので、あるテーマの研究に影響力のある重要な文献はどれか、指導教員より遙かに信頼性の高い情報を提供してくれる。

国内データベースの活用 日本の学部生が授業のレポートを書いたり、卒論のテーマを決めたりするには、本来、日本語データベースが整備されるべきであるが、国立情報学研究所と大学図書館の連携によって、急速に整備が進んでいる。本学図書館のホームページで国内データベースを開くと、新聞記事や経済データなど様々なデータベースが提供されている。心理学専攻としては、その中でも特に「論文情報ナビゲータ (CiNii)」の利用を促進していきたい。歴史が浅いのでPsycINFOには遠く及ばずサイテーションindexも未装備であるが、学会や研究機関の機関紙、紀要、ニュースレター、大会論文集などが次々と電子化され書誌情報だけでなくフルテキストの提供も急速に増えている。

実は、この記事を書くためにCiNiiで自分の名前の検索をしたら、「造園雑誌」という見知らぬ雑誌の記事が出てきた。フルテキスト提供なので中身を読んでみると同姓同名の他人ではなく自分が1981年に日本造園学会で公園の設計における行動分析の重要性を講演したときの内容が、機関紙に掲載され、その機関紙が国立情報学研究所の電子図書館に登録されたために、最近になって検索で読めるようになったというわけである。おそらく機関紙印刷時に目にしたはずであるが、まったく忘れていた。データベースの威力である。

最近、インターネットの検索だけでレポートを書く傾向があるが、インターネットの情報は玉石混淆である。せめてCiNiiを検索する習慣を身に付けてもらいたい。CiNiiで学位論文の検索や、サイテーションindexの装備が実現する日も近いことを願っている。

最近の異変

法科大学院教授 伊藤 博文



図書委員を仰せつかった関係からか、私のような者にまで原稿依頼がきてしまったようである。これまでこのコラムを執筆してこられた歴代の方々の文章をながめるにつけ、本当に私なんぞが書いて良いのかと疑問に思ってしまう。しかし、これも巡り合わせと覚悟を決めて、冊子タイトルの韋編（いへん）にちなみ異変というキーワードで日頃感ずるところを書いてみたい。しばし、お時間を頂戴したい。

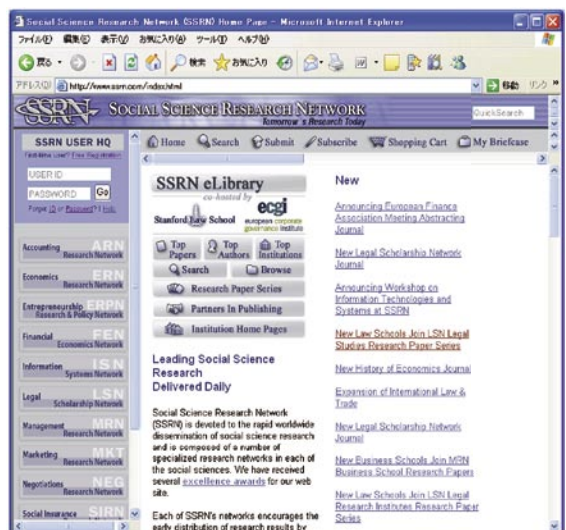
1. 学術論文の異変

最近読んだ雑誌記事*に、法学雑誌の権威構図が崩れつつあるというものがあった。場はアメリカ法学界である。アメリカでも研究業績評価の対象とされるのは、如何に権威有るロー・ジャーナル（法律雑誌）に自分の論文が掲載されるかである。しかし、最近はこの異変が起きているようである。それはインターネットの影響、とくにブログの影響が大きいようである。若い世代の法学者は、自分の書いた論文が伝統的なロー・ジャーナルに掲載されることに、さほどの意義を感じていない。つまり研究成果を公表するメディアとして従来型の紙媒体による法律雑誌ではなく、インターネットで直接公開してしまうという傾向である。そして、法学者の一部はインターネット上で草稿段階の論文を公表し、多くの講評・批判を期待し論文の質を向上させようとする。そこで登場したのが、Social Science Research Network（右図）というサイトで、そのような論文などを分野別に公開している。この

サイトから、どれだけ多くのダウンロードがなされたかで、論文の質および研究者の質を評価できるサイトでもある。

更には、ブログの普及が異変を増進させている。つまり、学者が日々の研究成果をブログに書き込むとこれに他の学者がコメントを付けて、ブログ上でハイレベルな議論が行われる。これは従来型の論文とは異なる、貴重な情報発信源となる。

これまで、学術論文の公表は、原稿用紙に手書きで書いてそれを印刷業者に手渡しして校正を経て印刷出版＝公表という形をとってきた。それが、手書き原稿からワープロに変わり、原稿手渡しがメール入稿へと変わる。製版も活字を組むやり方から電子写植へと変わる。ここまでは従来型の学術情報公開手法にICTが取り込まれ作業効率が向上したといった点にとどまる。しかし最近では、学者自らが書いた論文を直接自身のウェブサイトで公開する。発案の先後を争う分野では、



SSR<<http://www.ssrn.com/>>

論文の体裁を整えない前の状態でもウェブで公開する。もっと進めて、それがブログとなり、日常の日々思うことをブログに書き込んでおくこととなる。この時点で、もはや紙媒体の学術雑誌では実現できない環境となり、その不要論まで出てきてしまう。読者にとっても執筆者にとっても、便利なことは言うまでもない。読者は自宅で居ながらにして、コンピュータ画面上から必要な論文が読めるのである。執筆者にすれば原稿締切に悩まされることなく、書きたいことを書いたときに公開できる。もちろんコストは殆どかからない。情報の発信者にも受信者にも福音である。

では、この異変が図書館にもたらす影響について項を改め書いてみたい。

2. 図書館のあり方の異変

図書館は知の集合地であり、発信基地でもある。図書館を経由しないで情報発信および情報受信が行われるということは、図書館の存在意義を根底から揺るがすものになる。電子図書館 (Digital Library) といった構想が打ち上げられた時からこれは言われてきたことである。図書館のあり方に異変が起き、新たな生き残り策が模索されなければならないことは焦眉の問題である。これは図書館の未来を考える上で重要な論点である。この種の議論は、これまでも指摘されてきたことであるが、現実にはその速度が予想以上に遅くて実感しにくいものであった。しかし今、それが着実に訪れようとしているのである。

3. 権威の異変

これまでの学術情報の権威付けを行うものは、どこの雑誌に掲載されたか、どこの大学の教授が書いたものか、どこの図書館に収蔵されている資料かといった権威付けが幅をきかせてきた。しかし、その権威構造が崩れつつある。いまはどのサイトに私の学術情報がアップロードされているか、どのサイト

からリンクが張られているか、何回その論文はダウンロードされたのか、こんな指標が学術論文の権威付け及び学者の研究業績評価に用いられる時代になりつつある。情報技術革命の加速度的な進化と末端への普及に伴い、学術情報環境はめまぐるしく変わる。そしてその変化が、学術世界の序列化にも徐々に変化をもたらしているのである。

4. ロースクール教育と法科大学院図書館

2004年度から始まった法科大学院 (ロースクール) も法学教育の中での異変である。これまでにない法律学の専門職教育を行う場として設立された。ここ愛知大学でも、法科大学院設置に合わせて法科大学院図書館を、車道校舎5階に設置している。この法科大学院図書館も従来の図書館のあり方からは異変と言えるものかも知れない。蔵書とキャレールが一体化した図書室で、法科大学院生の学習の場であり、一日の大半を過ごす生活の場でもある。このような学習環境は、院生にもすこぶる好評である。そして、今悩むことは、限られた図書予算内でどのように「異変」に対応していくかである。電子メディアへの移行は、図書館空間の空気を増やし、データベース費等の高騰をもたらす一方で、まだまだ紙の書籍を求める強い声に応えなければならない。紙と電子のバランスをどのようにするかは、当面頭を悩ませる問題である。異変という時代の波に乗り遅れないように心がけ、ユーザーにとって最善の教学環境を実現できるように努力していかなければならない。

この目まぐるしい異変の流れについていけるのか私自身も心配で、健康に留意し、胃辺に異変を感じることをないように、研究に邁進したいと考えている今日この頃である。

* Terry Carter, *Revising Law Review*, A.B.A.J. Jul. 2006, at 20.

「読書空間」

経営学部 後 千代



修士、博士課程の院生時代、名古屋校舎の図書館には大変お世話になった。米国の議会資料や雑誌が豊富で、そのコピーのために何日か続けて書庫に1日中籠っていると、

3日目には猛烈な頭痛が襲ってくる。しかもその回復に2、3日かかってしまって困った。

酸素よりも二酸化炭素の方が重いから、きっと書庫の底の方にいると酸欠状態になるに違いないと思っていた。だから続けて2日以上、1日中書庫に籠らないように用心してきた。

子供の頃から山口県宇部市の海沿いで、瀬戸内海からの潮風を吸いながら育ったせいか、空気の悪いところでは身体がすぐに反応してしまう。

書庫に限らず、閲覧室やコンピュータがたくさん置いてあるスペースも含めとても息苦しい。だから階下の閲覧室で黙々と長時間勉強している学生を見ると感心したり、心配したり。

私も集中したい時に、電話などに邪魔されなくてすむ閲覧室を時々利用するが、なかなか長居は難しい。

逆に、ついつい長居してしまうお気に入りの読書空間が今のところ2箇所ある。1つは、数年前から日本でも出てきた、購入する前にコーヒーやお茶をいただきながら読める本屋さんである。出張などで名古屋駅を通る時にはわざわざ時間を調整して寄るお気に入りには名古屋テルミナ地下2階の三省堂だ。7割がた読んでしまっても、結局続きを読みたくて、買って帰ってしまうのだから、時々本が汚れたとしてもお店にとっても良くできたシステムだ。香りと空間が心地よい。

ワシントンDCのジョージタウン大学の学

生街の本屋で、初めてこういう本屋さんを見た時は何だか不思議な気がした。学生達がいっぱいにコーヒーやサンドイッチを頬張りながら持参した分厚いテキストを読んでいたりと、購入する前の本を読んでいたりと。席のない学生は、好きなところに座りこんで床にコーヒーを置いて読んでいる。お金がなくて注文しなくてもコーヒーの良い香りを楽しみながら読書ができる。

2つ目は、南山大学の近くにある「ライブラリー」という漫画喫茶兼インターネットカフェで、もう4半世紀も前から利用している。漫画だけでなく、新聞、雑誌、週刊のビジネス雑誌などは大体ここで読める。

古い木の机と木の椅子が心地よい。医師の国家試験の前には学生が何時間も籠ってそれらしいテキストで勉強している。恐らく名大生だろう。超過分のお金は当然払うが、その分緊張感がある。息抜きをしながら読書や勉強ができるから、長く続けられる。

学生を育てるといった施設ではない本屋や喫茶店で、新刊書の汚れやコンピュータに飲物を溢してしまうリスクを前提で、居心地の良い読書空間を提供しているのだから、大学ももう少し太っ腹に大学の資産である書籍（稀少本などは例外だろうが）の回転率を上げる工夫をしてみてもはどうだろうか。

本や雑誌は読まれてナンボだと思う。以前、静岡の大学の改革の際、院生が自分で図書館の鍵を一部開けて24時間使える体制にした。するとやはり本の紛失が発生したという。その時、改革を手がけた先生の苦し紛れの言い訳が素敵だった。

「使わずに死蔵されている本を書庫に抱えているよりも、紛失してしまって図書館にはなくとも、どこかで院生に使われている方が本の有効性は高い、ずっとマシではないか」と。

図書館での思い出—学生時代を振り返って—

経営学部 水 野 孝 彦

図書館の利用の仕方が人それぞれ違うのは当然であるが、そこが大学の中心部であることには変わらない。図書館は、閲覧・閲読、学習、研究、資料収集といった知的活動のための空間を提供している。ここでは、自分の学生時代を振り返り、図書館との関わりについて2、3の思い出を述べることにしたい。

自分にとって図書館が身近な存在になったのは大学3年生の頃である。ゼミ（河合秀敏先生、愛知大学名誉教授）に入ったことがきっかけとなった。河合ゼミは多くの大学教員や会計専門家を輩出した伝統あるゼミとして知られていた。決して無理強いすることのない温厚な先生であるが、ゼミの雰囲気や仲間刺激され、図書館を勉強する場として頻繁に利用するようになった。

授業が終わると図書館に向かい、よく閉館までゼミの友人と勉強した。特別なことをしているわけでもないのに、「充実した学生生活を送っている」と自負していたのは、大学は主体的に学ぶ場であるという意味を初めて理解したからだと思う。学習意欲が芽生え、図書館での勉強はとても楽しいものであった。将来への期待と不安を抱えるなか、とにかく切磋琢磨することで、少しでも自分を向上させようとしていたのだと思う。

大学院に進学して、図書館は2つの意味で欠かせない存在になった。1つは、当然のことだが研究資料を収集する場である。院生になると、資料収集のために足繁く図書館に通った。過去の議論を歴史的に体系づけていくことが自分の研究スタイルであったため、和洋問わず、古い専門雑誌や書籍を必要とした。ほとんど手付かずの古い雑誌や洋書を手に取り、彼方此方ページをめくっては

探していた記述を見つけることに楽しさを覚えた。幸い愛大図書館には自分の研究にとって必要な資料の多くが揃っていた。必要な資料が図書館にないときにはレファレンスカウンターに相談し、他大学や海外から取り寄せるなどして入手した。レファレンスは資料に困ったときの駆け込み場である。迷える訪問者のために即座に端末を開いてお目当ての文献を検索してくれる。親切で頼り甲斐のある存在だ。

もう1つは、アルバイトをしたことである。週2、3回程度メディアゾーンのカウンターで受付業務に就くことができた。学内でアルバイトができることほど有り難いことはない。移動時間を気にせず、僅かながらにも経済的支えを得ることができたからである。業務自体はそれほど複雑ではなかったが、出入り口に一番近いカウンターであるため、外来者に応対したり、雨の日の傘持込みやセンサーの感知に対処したりするなど重要な仕事があった。

図書館はこのように自分にとって学習の場であったり、資料収集や仕事をする場であった。そういう場があったおかげで、学習意欲を燃やすことができたと思うし、研究に専念することができたと思う。ただ今思うと、目の前の目的を果たすための限られた利用でしかなかったといえなくもない。図書館をもっと広く利用して、自分の専門以外の分野、たとえば文学、歴史、哲学、宗教などの学習に取り組むことも大事ではなかったかとも思う。遅まきながら、こうした分野における知識の重要性を感じるようになった。大学の中心部である図書館をもっと上手に活用する方法を考え出すことが今後の課題になりそうだ。

『東亜同文書院大旅行誌』全 33 巻 オンデマンド版今ここに蘇る！

豊橋図書館 成 瀬 さよ子

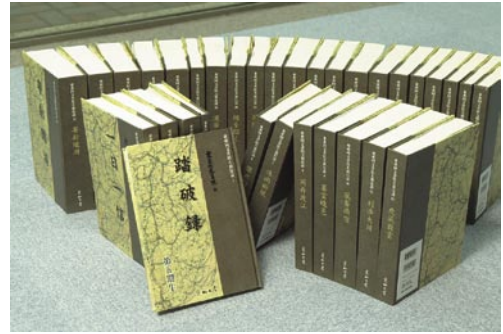
愛知大学創立60周年記念事業として復刻出版された『東亜同文書院大旅行誌』は、戦前の上海に在った東亜同文書院の学生達が、毎年中国大陸を大旅行した際に記録した日誌・紀行文をまとめて、各期生ごとに単行本として出版したものの総称である。

第五期生から第四十期生にわたる『大旅行誌』は、1907年から1942年にかけて混乱期の中国の実情を知る大変貴重な記録といえる。漢文調で旧仮名使い、見たことも無い難しい漢字や中国の地名に苦慮するが、今回原本を拡大して復刻したことで、多少読みやすくなったと思っている。

よく質問されるのが、「全体で33巻もあり、あまりに大部であるためどこから読めばよいのか分からずに尻込みをしてしまう。どの巻のどの班が面白かったのか、どんなことが記載してあるのか少しでも教えてほしい」と言われる。全巻を読みこなしていない私が書くのもおこがましいが、これまで読んで面白かったところを書き溜めた何点かを紹介することによって多少なりとも読んでみようかな？ と興味をもたれればと思い、記すこととした。

第5巻『弧帆雙蹄』：第九期生の「漢中隊」
p. 385- は、学術的な興味を引く記録がある。

漢陽の革命軍本部に学生たちが立ち寄ったときには、なんと辛亥革命の最中であつた。一時は捕らわれの身となるが、革命に対して意見を求められ、また革命の主義を述べて、「諸君も革命に賛成して、日本でも吹聴してください」と言われている。黄興が、武昌に入り、漢陽総司令官の拝大将式があり、黎元洪は司令刀を黄興に渡し…。学生たちは、後からそれが辛亥革命（1911年）であつた



ことを知るのである。東亜同文書院記念センターに写真資料があるので見ていただきたいが、孫文を支えた黄興や、軍閥の親分である黎元洪という歴史上の有名人物たちに学生たちが出会っていることに感激した。

第14巻『虎穴龍領』：第十九期生「青海行」
p. 1- は、当時の様子がよく記されている。

陝西督軍争奪戦で、荒らされて人は着るに衣なく、食うに糧なく寝るに布団なきの惨状、全く見るに忍びない。また、青海では、石原莞爾らと同宿となり、夕食を共にし青海の羊毛、甘肅の羊毛について親切な説明を聞いている。…邠州は、三原西安に通ずるシルクロードの分岐点で、今は住民は多くないこの田舎町に福音堂があり、白人宣教師が二人も頑張っているのに驚いた。…深夜に土匪の威嚇銃声を何度も聞いた。町には天主教の教会、信者200人余り、新教派の教会には2000人の信者、病院もあり商店にはライオン歯磨き、縫針、仁丹が並んでいた。青海の大草原で案内人とはぐれ、方向を見失い、飢えと寒さで死を予感したとき、馬麒將軍配下に助けられ人の温情に涙を流している。顔にバターを塗った蛮人の顔色が黒々と光っていたのは、青海の湖水には塩分が高いため日焼け防止だと判った。また馬麒將軍の朝

宗の礼（天子に諸侯がお目にかかる儀式）にも学生たちは立ち会っている。

第15巻『金聲玉振』：第二十期生「興安の月に騎して」 p.311- 学生たちの様子が面白い。

興安嶺では、6名の馬勇（馬術に長けた警察官）に守られて行けば、途中で食料は何とかなると思い少ししか持っていかなかった。多倫を出発して2日目、行けども行けども人家がない。食料がない。馬勇たちは、焼餅をかじりながら進んでいる。馬勇さん情けあるなら1つ下さいと言いたいが、俺も日本人だ。武士は食わねど高楊枝の心境で我慢。飲まず食わずで食べたひえの団子のうまかったこと。…途中の民家で昼食、女主人がひえの団子やえんどう豆の煮物を出してくれた…そのうちにぞろぞろ人が集まってきて、眼を腫らした若人が眼を治してくれと言われ、大学目薬を点眼して一瓶あげた。次に男の子のお通じが出ないのでお医者様見てやってくれと言われ、得意になって口をアーンとあけさせ勿体ぶって虫下しを一服吞ませた。巡査が風邪で寝ている母親が血を吐いたので薬をと言われ、肺病と考えアスピリンを3服処方、最後に生まれて3ヶ月ぐらいの赤ん坊を抱いた母親が乳を飲まないの、助けてくれと嘆願した。赤ん坊に大人の薬は飲ませないとうほうほうの体で退散した。

同15巻の「秦山蜀江」 p.143- では、さすが東亜同文書院の学生は志が違うと感心した。

成都では、フランス人をトップとして英米人の宣教師が巾を利かせていた。一人は60歳ぐらいのカナダ人ギルホーン氏、宣教師として成都に30年以上住んでいる。医術を施して人望を得、立派な病院、広大な教会を持っていた。もう一人は、アメリカ人のカンライト氏医師兼宣教師で、在住25年で3階建ての大病院を経営。住民は、漢方医から安い西洋医にかかるようになった。日本を考えたとき、本気で徹底的に中国を研究しているものが果たして何人いるか。中国にいる日本の商人、官吏、宗教家たちは、目先

の考えで行動しており、彼ら西洋人のように定着して中国人の中に入っていくという考え方は皆無ではなかろうか？ 日本における中国関係の研究者は、否応無しに我々でなければならぬ。東亜同文書院に籍を有する我々が第一線に立ってその旗を掲げなければ果たして誰ができるのか。成都でこのことを痛感した。

第16巻『彩雲光霞』：第二十一期生「匪徒に遇ふて」 p.1- では、当時の混乱した世情が分かる。学生の度胸に驚かされるが、誰一人殺されなかったことは、特記に値する。

貴州省北部の都市遵義で、辺りはトウギビ畑の人影も無い淋しいところ、二人の担ぎやを先頭に4人（の学生）が続いた。突然銃口を向けられ頭目が、「こいつらは、外国人だ。品物はいらぬ、武器と食料がほしい」と言った。槍、太刀を持った部下が震えながら近づいてくる。銀3百元、メガネ、水筒、上着、写真もフィルムも剥ぎ取られた。手も後手に縛られた。人質と思っていたが、農家の入り口に來ると土匪たちは、一目散に山の方に逃げ出した。銃口を突きつけられたときには、草をとっていた百姓たちはもういない。…2度目の土匪に襲われる。武器はピストル、鶴田が持っていた錢を全て渡した。土匪が立ち去るとき可哀相に思ったか五十錢くれるという。頭にきたので、不要と叫んだ。…途中で知事に会い銀四元を旅費にもらい、元土匪の頭目に護送を頼んでくれた。途中では、宿泊代も食事代も不要だった。…3度目の土匪に襲われた。こちらは慣れて平気である。ご苦労さんと声をかけて、荷物を開けた。破れた油紙に包んだ日記を見せたら、通ってよい。…

いかがでしたか？ ほんの一部の紹介ですが、興味をもたれた方は、ぜひオンデマンド版をお読みください。また私が作成した『大旅行誌』全巻の検索ツールがお役に立てれば嬉しいです。

hegel.aichi-u.ac.jp/tools/toa/index.html

『天津同文書院中學章程』について

車道図書館 成 田 昭 男

一九二一年（大正十年）、東亜同文会が中国天津に天津同文書院を、翌年漢口にて漢口同文書院を設立した。それはかの地に中国人子弟の教育機関の設立を求め、一九一八年（大正七年）帝国議会に提出された「支那人教育ノ施設ニ関スル建議案」にもとづく教育事業であつた。

その学校の資料を、今年インターネット古書店より、偶然にも個人的に入手できた。それは『天津同文書院中學章程』といい、表紙には書名、その横に「范源廉題」との表記がある。裏表紙の記載は、天津南門外海光寺橋南徐胡圈村／天津同文書院／電話三八八五號。出版年の記載はないがおそらく設立年の一九二一年と思われる。言語は中国語、縦書き十二頁の小冊子。

さっそく最近利用を覚えただけのアジア歴史資料センター（2001年開設の電子資料センター）の閲覧サイトで、「天津同文書院」のキーワード検索をしてみると、表紙に同じ范源廉題のある『天津同文書院中學章程』が閲覧できた（Ref.B05015332000）。また単に同じ書名のもの（外務省、已號用紙にタイプ打？）も閲覧できた。ただし、それは第五条、第八条、第十七条に異同があり、英語の教授時数が $4+4+7+7=22$ となっている。また手書きの大正十三年十月末現在「職員及俸給」表の人物にも異同がある。なお范源廉は民国の教育総長、北京師範大学学長を歴任した人物である。彼の氏名の表記が范源濂とされている資料もある。

以下、該書を翻訳し参考資料として供したい。

天津同文書院中學章程（翻訳）

第 一 条 本院は中華民國中学令にもとづき、普通教育を完成して健全なる国民の養成を目的とする。
(注)

第 二 条 本院は中学本科および中学実科を設ける。
修業年限は四年とする。ただし実科は学生の卒業後の生計を考え、商業において必須である知識、技能を特に授与する。

第二章 職 員

第 三 条 本院は名誉院長より以下の職員における校務の分掌は左のごとくである。

(甲) 監 督 院内の一切の事務を統轄する。

(乙) 教務主任 院長および監督の意を受け、教務に関する一切の事務を統轄する。

(丙) 庶務主任 院長および監督の意を受け、全院の庶務を統轄する。

(丁) 教 員 院長および監督の意を受け、また教務主任の指揮のもと、学科の教授および学生の教育指導の事務を分担する。

(戊) 学 監 院長および監督の意を受け、また教務主任の指揮のもと、訓育上の一切の事務を司る。

(巳) 舍 監 院長および監督の意を受け、また教務主任および学監の指揮のもと、寄宿舎の事務を管理する。

(庚) 事 務 員 監督、教務主任あるいは庶務主任の指揮を受け、会計・庶務の事務を分担する。

第 四 条 本院は参議委員会を設け、内外の名士を会員として招き、本院の重要事項に関して相談する。

第三章 学科課程および教授時数

第 五 条 本科および実科学科課程、教授時数は左のごとくである。

	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年
修 身	一	一	一	一
国 文	七	七	五	五
日 語	五	五	四	四
英 語	六	六	七	七
数 学	五	五	本科 五 実科 四	本科 五 実科 四
歴 史	二	二	二	本科 二 実科 一
地 理	二	二	二	本科 二 実科 一
博 物	三	三		
物 理			三	二
化 学			二	二
商 業				実科 三
簿 記			実科 二	実科 二
図 画	一	一	一	一
体 操	三	三	三	三
合 計	三五	三五	本科三五 実科三六	本科三四 実科三六

注意 必要によって各学年の教授時数は一時数あるいは二時数を加えることができる。

第四章 学年、学期、休業日

第 六 条 学年は八月一日から翌年の七月三十一日までとする。

第 七 条 一学年を三学期とする。

第一学期 八月一日から十二月三十一日

第二学期 一月一日から三月三十一日

第三学期 四月一日から七月三十一日

第 八 条 休業日は左記の通りとする。

一、国 慶 日 十月十日

二、共和記念日 二月十二日

三、孔子生誕日 陰暦八月二十七日

四、節 日 陰暦元旦、端午、中秋、冬至の日

五、日 曜 日

六、春 休 み 四月一日から七日

七、夏 休 み 七月一日から八月二十日

八、本院記念日 十月一日

九、正 月 休 み 十二月三十日から一月三日

十、冬 休 み 陰暦一月一日から一月十五日

第五章 入学および退学

第 九 条 第一学年の入学資格は、身体健全、品行端正であり、高等小学校卒業あるいは年齢が十三歳以上にて同等の学力を有するもの。

第 十 条 学生に欠員があるときは、資格相当者をもって補充し、入学試験を実施する。

第 十 一 条 入学志願するものは、入学願書に最近撮影した写真一枚をそえ本院に提出する。

(附)入 学 願 書

姓名、年齢、生年月日、本籍、家族構成、現住所、経歴、志願学年、卒業後の志願（進路）、入学年月日

第 十 二 条 入学試験の時期および応募学生の種別については、適時に本院より公布する。

第 十 三 条 入学許可を得たものは、確かな保証人が作った保証書を提出し、本院はそれを保存する。

保 証 書

保 証 人：姓名印／住所／職業

保証事項：甲： 学生 入本院 科第 学年級 理由なく退学あるいは他の学校へ受験のため中途退学する場合は、賠償を納め、院の公費とする。

：乙： やむを得ない事故のため退学あるいは転学しなければならない場合は、保証人の申し出により、事由なき退学に準じこれを審査し許可する。

：丙： 学生は納めるべき費用を滞納している場合は、保証人はこれに責任を負う。

第六章 保 証 人

第 十 四 条 保証人は、学生の父兄、親族および関係人で、天津にて正当な職業者であることを資格とする。ただし、特別に院長の許可を得たものはこの限りではない。

第十五条 本院より保証人に照会がある場合は、すみやかに回答するかあるいは通知で指定した日時に来院すること。

第十六条 保証人が住所変更あるいは旅行する場合は、文書にて本院に届け出ること。なお必要な場合は代理人を推挙すること。

第七章 費用

第十七条 学生は各学期の始業より五日以内に、左記の各項目の費用の三分の一を納付する。

- (甲) 学 費 全年二十四元
- (乙) 宿 費 全年十二元
- (丙) 実験費 全年四元
- (丁) 膳 費 全年五十元 (余りは返し、不足は補う)
- (戊) 雑 費 全年三元

第八章 試験

第十八条 試験は、平時試験、学期試験、学年試験とにわけ、それぞれが左のごとくである。

甲、平時試験は約一月に一度、授業時間におこなう。

乙、学期試験は第一、第二の両学期末に、それぞれの学期で授業した科目にて試験をおこなう。

丙、学年試験は学年末に、その学年で教授した科目にて試験をおこなう。

第十九条 試験各学科の成績は百点を満点とするが、一学科が若干の科目に分かれているものは、若干の学科の点数を合算する。

第二十条 学期の成績は平時試験と学期試験の両成績の平均点数にてこれを定め、学年成績は第三学期の成績と第一、第二両学期の成績の平均点数にてこれを定める。

第二十一条 学年の成績の総平均点数六十点を満たし、各科目の点数が四十点以上で、品行点数が六十点以上のものは進級とし、それに達しないものは留年とする。

第二十二条 学期、学年の成績評定は、甲乙丙丁の四つに区分し、保証人に通知する。八十点以上を甲、七十点以上を乙、六十点以上を丙とし、六十点に満たないものを丁とする。

第二十三条 病気あるいはやむを得ざる事故により、学年試験を欠席したものには追試験を認める。ただし、もとより学業優良、品行端正のものは、その平時試験の成績に準じて進級を認めるものとする。

第二十四条 学期試験を欠席したものは、すべて追試験を認めない。ただしやむを得ない事情のあるものは、平時試験の点数の八割を学期の成績とする。平時試験をも欠席している場合は、前学期の当該学科の得点の八割を本学期の成績とする。

第二十五条 第一、第二、第三学年の学年試験を合格したものには修業証書を授与し、第四学年の学年試験に合格したものには卒業証書を授与する。

第九章 生徒心得

第二十六条 在校学生は本校規則を遵守し、師長(教師)の訓戒、言行の指導に対し誠実・真摯であること。

第二十七条 登校の節は必ず制服、制帽を着用し、病気でやむを得ない場合は学監の許可をえて暫くの間不着用を認める。

第二十八条 事由なく欠席、遅刻、早退をしてはならない。やむを得ず欠席、遅刻する場合は、必ず前もって休みの願いを提出する、あるいは事後に保証人がその旨を知らせること。早退する時は教員あるいは学監の許可をえること。

第二十九条 師長(教師)の許可なく私に集会をもつてはならない。

第三十条 住居は、寄宿舎の外には自宅、近親者、親友の家に限ること。

第十章 賞 罰

第三十一条 品行端正、成績優良で、他の学生の模範となるものには特別の優待をするものとする。

第三十二条 本院は教育上やむを得ざる時は、左の諸法により学生に懲戒を科すものとする。

- 一、訓 斥 (訓戒)
- 二、立 正 (忠誠を誓う)
- 三、貶 位 (降格)
- 四、記 過 (過失を記録し譴責する)
- 五、停 学
- 六、革 除 (除籍)

第三十三条 本院の器具、什器を毀損したものは、その価格にしたがい弁償するものとし、状況を斟酌し相当なる罰を科する。

第三十四条 左記の各号のひとつに該当する学生には退学を命ずる。

- 一、身体が虚弱で学業成就の見込みのないもの。
- 二、品性が不良でその改悛の見込みのないもの。
- 三、連続二回留年をし、なお合格しないもの。
- 四、本院の名譽を損なう行いをしたもの。
- 五、譴責が六回に至つたもの。
- 六、正当な事由なく一月以上欠席したもの。
- 七、信頼できる保証人がなく、費用を一ヶ月滞納したもの。

附 則
第三十五条 上記以外の各規定は別にこれを定める。

職 教 員 姓 名
名 譽 校 長 曾任吉林省長 翰林
監 督 東京高等師範学校卒業
教務主任兼教員 東京高等師範学校卒業
庶務主任兼教員 京都帝国大学卒業
学 監 兼 教 員 直隸高等師範学校卒業
教 員 直隸高等学堂卒業北洋大学堂
予科卒業廩膳生
教 員 直隸高等師範学校卒業
舎 監 兼 教 員 広西優級師範学校卒業
教 員 早稲田大学卒業
教 員 歩 兵 中 尉
教 員 直隸高等工業学校卒業
教 員 北洋大学法科卒業
教 員 直隸高等工業学校卒業
事務員兼助教員 直隸商業専門学校卒業
事 務 員

郭 宗 熙
江 藤 榮 吉
張 庭 芝
藤 江 眞 文
成 培 咨
王 馨 蘭
謝 丕 閣
陳 國 華
矢澤千太郎
松本鹿太郎
陳 璿
劉 書 城
李 秉 鈞
王 乃 助
孫 秀 山

〔*人名は原文の表記とした〕

(注) 1912年に公布された「中学校令」の第一条は「中学校以完足普通教育造成健全国民為宗旨」で、まったく同じ文言である。

図書館で使えるデータベース

データベースの紹介(音楽配信サービス)



図書館のホームページからたくさんのオンラインデータベースが利用できます。今回はストリーミング配信されるクラシック音楽を楽しむことができる「ナクソス・ミュージック・ライブラリー」を紹介します。クラシック音楽のコレクションであるナクソスを自由にストリーミング再生できるインターネット音楽ライブラリーです。7,000人の作曲家、16万曲以上の音源をCD音質で再生可能です。この機会にクラシック音楽に触れてみてはいかがでしょうか。

No	データベース名称	簡単な特徴
1	ナクソス・ミュージック・ライブラリー (NAXOS Music Library) CD 1万枚、35以上のレーベル、16万曲以上の音楽を自由に再生できるインターネット音楽ライブラリーです。クラシック音楽の入門としても、クラシック音楽愛好家にも十分ご活用可能です。	標準でCDと同等の音質(128Kbps)となっていますが、配信音質をネットワーク転送速度に応じて選択ができます。音楽再生にはWindows Media Playerが必要です。曲名やタイトルなど日本語での検索も可能です。

推薦図書コーナーへのお誘い

名古屋図書館

名古屋図書館には法学部、経営学部、現代中国学部の学生の皆さんにおススメの本を紹介するコーナーがあります。図書館の入門ゼミを受けた人には案内していますが、今回は経営学部の国際経営コース推薦図書をご紹介します。このほかにも多くの本がコメントつきで展示してあります。是非、図書館に来て手にとって見てください。



ニューヨークのミステコ族

池森 竜一 著

米国の底辺を支えるヒスパニック族系移民の実態を名古屋出身のジャーナリストが描いた秀作ルポルタージュ。筆者が実際に交流した人々について描いているので、海外の知識がない人にもお勧め。

テヘラン商売往来

岩崎 葉子 著

イラン商人の商売の仕方などを具体的に示すことによって、とっつきにくく思えるアラブ世界に関してわかりやすく示している。アラブ初心者にはお勧めの本。

デルの革命

マイケル・デル、キャザリン・フレッドマン 著

現在、世界のPCのトップシェアを誇るデルの経営について、創業者マイケル・デル自ら述べた本です。世界的な企業家の伝記としても非常に面白い読み物ですが、情報技術の進展が企業の組織や戦略の変化にどのような影響を与えてきたかという問題の理解にも大きく役立ちます。

グローバル・ブランド管理

大石 芳裕 編著

国際マーケティングにおいて重要度を高めるブランドに関して、理論と実証の両面から示している。グローバル・ブランドに関して突っ込んだ勉強をしたい人にはお勧め。

経営史講義 [第2版]

大河内 暁男 著

この本では、主に産業革命期に始まるイギリスの近代企業の成立から、アメリカにおける巨大企業の発展までを扱っています。なぜアメリカでフォードのような巨大企業が生まれたかなど欧米の企業の歴史に興味のある学生は是非読んでみてください。

また、現代経営学の基礎は、当時のアメリカで生まれました。ですから、例えば集権的職能性から分権的事業部制へといった組織の面、テイラーの科学的管理法やホーソン実験といった管理の面などの経営学の基本的な側面を勉強するのに役立ちます。

世界を制した中小企業

黒崎 誠 著

国際的に活躍している日本企業はトヨタやSONYといった大企業だけではなく、中小企業であっても世界トップシェアを誇る日本企業はたくさんあります。この本は、そうした世界的に活躍している日本の中小企業のケースを集めた本です。読み物として非常に面白いのはもちろんのこと、国際経営論や戦略論、中小企業論、イノベーション論など経営学の様々な領域の理解にも大きく役立ちます。

日本の競争戦略

マイケル・E・ポーター、竹内 弘高 共著

戦略論の第1人者であるポーターが、90年代後半以降の日本企業の国際戦略について述べた本です。これまで日本企業の製品は、価格や品質の面で、外国の企業の製品との間に大きな差をつけていました。しかしポーターは、すでに外国企業は価格や品質の面で日本製品に追いついているため、日本企業にはこれまでとは違った独自の戦略が求められていると述べています。これからの日本企業の国際競争に興味がある学生は是非読んでみてください。皆さんもよく知っている日本企業のケースがたくさん出てきて面白く読めます。



愛知大学創立60周年記念

第8回図書館総合展特別企画

11月20日(月)▶22日(水)

10:00~18:00

会場 パシフィコ横浜 展示ホールC

知を愛する者が集う 愛知大学の特別展示会

— のこされた東亜同文書院大学の資料を追う —



荒尾精先生 根津一院長 本間喜一学長 近衛篤磨東亜同文会会長 岸田吟香

【展示コーナー】

「東亜同文書院大学」から「愛知大学」へ
孫文を支えた書院の山田良政・純三郎兄弟

【参加無料・定員200名】

愛知大学主催フォーラム

「海を渡った若者たち」

開催日時 **11月21日(火)**
13:00~17:00

会場 **パシフィコ横浜
アネックスホール第5会場**

●申込みメールアドレス/ tshien@ml.aichi-u.ac.jp

●FAX/0532-47-4129



第一部「漫画で描こうとした大陸と日本青年」

講師: 安彦良和
(神戸芸術工科大学教授
漫画家、機動戦士ガンダムのアニメーター)



第二部「東亜同文書院生が記録した近代中国」

講師: 藤田佳久
(愛知大学文学部教授
愛知大学東亜同文書院大学記念センター長)



第三部「満洲の青少年像」

講師: Ronald Suleski
(ハーバード大学
フェアバンク東アジア研究所 副所長)

主催: 愛知大学東亜同文書院大学記念センター/オープン・リサーチ・センター

後援: 愛知大学同窓会・滬友会

愛知大学東亜同文書院記念センターは、2006年文部科学省の認可を受けて、オープン・リサーチ・センターを設置しました。今後東亜同文書院に関する多面的な研究を行い、それらを公表すると共に展示会や講演会・研究会など開催します。

東亜同文書院は、1901年東亜同文会会長近衛篤磨によって中国の上海に創立され、日中提携の人材育成を目的とし、中国・アジア重視の国際人を養成し、ここから日中関係に貢献する多くの人材が育ちました。1945年の敗戦により、東亜同文書院は半世紀にわたる歴史の幕を閉じました。しかし、最後の学長である本間喜一は、東亜同文書院の教職員及び学生を受け入れるべく豊橋の地に愛知大学を創立しました。

今回は、同センターに収蔵する「書院」及び「孫文を支えた書院の山田良政・純三郎兄弟」関係資料の一部を特別展示いたします。フォーラムのテーマは、「海を渡った若者たち」で、上記の方々の講演を行います。入場は無料ですが、フォーラムの参加は、事前に申込が必要です(メールアドレス: tshien@ml.aichi-u.ac.jp)。多くの皆様方のご来場をお待ちしています。(成瀬 さよ子)

お問い合わせ: 愛知大学東亜同文書院大学記念センター TEL0532-47-4139(直)

編集・発行

愛知大学図書館

2006年11月1日発行 No.33

■豊橋図書館 〒441-8522 豊橋市町畑町字町畑1-1

☎(0532) 47-4181

■名古屋図書館 〒470-0296 西加茂郡三好町黒笹370

☎(0561) 36-1115

■車道図書館 〒461-8641 名古屋市東区筒井二丁目10-31

☎(052) 937-8116

URL <http://library.aichi-u.ac.jp>